

1990. 1



# はつらにくす

No. 21

学校法人大阪工大摂南大学図書館報

## 図書館のクリエイティブな利用について

— 一休さんの逸話から —

現代は情報化時代といわれ、巷にはあらゆる情報が氾濫している。しかし、自己の諸条件にあったものを見出し、それを有効に利用するなど情報を自己のものとして十分に生かしていくことは容易なことではない。

例えば、新聞紙上をにぎわしていた痛ましい事件もすぐに忘れられてしまう。忘れるということは、自己の心の痛みととらえていないから平気でいられるのであり、その時はひどいことをする奴もいるなど思いつつも、結局はただそれだけで終わってしまうのである。これではどうしても自己にかかわりのある場合を除いて、非常に浅い受け止めかたになってしまう。

図書館を利用する場合も同様で、必要にせまられたとき、あるいは心に痛みを感じたときに、調査したり閲覧したりするものは真剣で、その情報が生かされもするが、ただ漠然とランダムに閲覧するやり方では仲々自分の身につかないことが多い。

ところで、この「必要にせまられたとき」とは、例えば、定期試験期間であったり、レポートの提出時期であったり、いわば図書館の最も混雑するときでもある。多くの人はそういう零囲気の中に自分を置くことにより、苦しまぎれの力のある程度は発揮することができる。しかし、これはあくまでも受動的・他律的な姿勢であり、長い目で見ると案外自分の身につかないことが多い。やはり自主的・主体的な姿勢が必要に思われる。

トンチで有名な一休さんの逸話の中に  
— ある時、一休が虚無僧のまねをして、

図書館事務長

林 義 光



尺八を吹いて歩いていると、向うから知りあいの修験者がやって来て、「虚無僧」「虚無僧」と呼んだ。

「なんの用だ」と、ふりかえると、「虚無僧はどこへ行かれる」と聞いた。一休が、「風にまかせてまいる」と答えると、修験者は、「風のないときは」と問いかけた。一休は、尺八を持ちなおすと、ふうと一吹きして、「自分で吹いてまいる」と答えて、さっさと行ってしまった。

— 風のないときは自ら吹いてまわる……  
すなわち、自ら必要性を創り出していくことが肝要であり、(ついでに言わせてもらえば)その手段として例えば図書館があるのである。

以上のことがらはいずれも言うに易く、行うに難しいことではある。

話は変わるが、最近企業の採用担当者などが、学生に求める基本的な資質として、行動力や創造力にウエイトを置いているということをよく耳にする。不確定の時代といわれる今日、企業における繁栄は、固定観念にとられない創造力が勝負を決するというこのようだ。

こうした力を培うために図書館があり、何でも読んでやろう、見てやろうという積極的な利用者に十分応えられるようより一層充実を図っていきたいと考える。

今年も図書館をよろしく願います。

(引用：安藤英男著『一休 — 逸話でつづる生涯』すずき出版 188.12 A)

## 情報化社会に向けて

いよいよ90年代である。21世紀を目前にした、まさに激動の時代である。その時代に向けて、これからの社会はどう変わっていくのだろうか。また私たち自身はその社会においてどう生きていくべきなのだろうか。21世紀が迫っていることが実感として感じられると、柄にもなくそんなことを考えてしまう。

これからの社会を示す重要なキーワードとして「情報化社会」というのがある。この情報化社会という言葉には何か新しく、近未来的で、ワクワクするようなイメージが私にはある。もっといろいろなことを知りたい、そして快適な生活がしたいといった要求を満たしてくれるような気がするからだ。

しかし同時に、現在の社会を見てみると、マスメディアがもたらした情報化のおかげと思わざるを得ないような「画一化」が進んでいるのではないかとも思う。同じようなファッションや流行がまたたくまに蔓延し、どこへ行っても似たような風景、食べ物が並んでいる。「これからは個性の時代だ」とか「大衆からの感性派の台頭」などといわれて久しいが、私にはなかなか実感できない。

それに加えての最近のすさまじい技術革新である。ハイビジョン、衛星放送、パソコン通信といったニューメディア、マルチメディアがどんどん出現している。今のうちに「情報」に対

工大・IK4

筒井俊博



するキチッとした認識を確立しておかないと、将来なにかとんでもないことになりそうで怖い。

私は情報化社会を考えるうえで重要なポイントには次の三つがあると思う。自分の知りたい情報を公平、正確、迅速に入手できるかどうか、他人に知らせたい情報を自由に知らせることがができるかどうか、自分が知られたくない情報を守りきれぬかどうか、の三つである。

ここをしっかりと押さえておかないと、今まで以上に便利かつ強力になったニューメディアによって、一方的な「上意下達」式プロパガンダや商魂たくましい商品情報を押しつけられたり、その結果としてより一層の画一化が進む可能性がある。また政府や企業にとって利用価値のある私たちの個人的情報が集められ、知らぬ間にプライバシーが侵害されるといった恐れもあるのではないだろうか。

ここまで考えて思うことは、「情報」の一番本質的なものは、それが私たちの生活をより豊かにするための道具、手段にすぎないということだ。なんのために使うのか、それを使うことによって何をしたいのか、つまり、自分自身が主体的になることが重要なのではないだろうか。情報の流れの中で自立し、自ら判断し、自ら行動する「情報主権者」でなければならぬとつくづく思う。主人公は私たちなのだ。

影を抱く人、『抱影-ほうえい-』。

明治に生まれ、98歳で亡くなるまで終生星を愛し、星の文章を書きつづけたこの人の抱く影は、きっと、『星影』。

『星の抱影』として、一世を風靡した彼の星座随筆のアンソロジーをまとめたものが、この本です。

「星の美の神秘は、純粋の天文学者には、少なくとも研究室のドアの外のものであろう。けれど文学者畑の私は、星を仰いだり星を談るときには勿論、それが天文学の埒内に入っているときでも、いつも星を讃え星に驚こうとしている



『野尻抱影の本』  
全4巻  
野尻抱影著  
筑摩書店

自分に心づく。」と、語っています。

ですから、本格的な科学知識を求める人には、この4冊は物足りないでしょう。が、やはり、一読をおすすめします。

ホーキングもなるほどよいでしょう。机上で、相対性理論と量子論から宇宙を考える必要が

ある人もいるでしょう。しかし、そもそもそういう道に入ったのも、空に輝く星たちに憧れ、興味を持ったからではないでしょうか。少年の頃、星を見てドキドキした胸の思いを、きっと思い出させてくれるはずですよ。

もちろん、ただ純粹に「星が好き」と、いう人には、もってこいの本です。読みながら、思わず「うんうん。そうそう。」と、うなづくことが、きっと、多いはずです。

この4冊(918.68 N)は、それぞれ独立した内容ですので、どれから読むかは、あなたしだいです。

1巻は、「星空のロマンス」。移りゆく季節の中で見つめた星々のことを、叙情感に満ちた文章で綴ったエッセイ集です。

2巻は、「星の文学誌」。各国の文学と星との関わりを、やさしく説明しています。

3巻は、「山で見た星」。宇宙と文学をこよな

く愛した抱影があたためてきた、小説とエッセイ。「星の翁」と呼ばれる抱影の、ひととなりを知ることでできる内容です。

4巻は、「ロンドン怪盗伝」。ロンドンの裏町によみがえる、心優しき盗賊たち。「この世の星」の物語です。

さて、これからの季節は、星を見るには寒くてつらいものがありますが、北風にピューピュー磨かれた空は澄みわたり、オリオンの三星や、シリウスの輝きが、一段と冴える時期でもあります。この本を傍らに、暫し時を忘れ、天空に思いを馳せてみませんか。(Y.O)

## シリーズ淀川ぶらり散策

第12話

「大阪城 その2 天守炎上」

浅井 三千治

ドン、ドッ、ドーンと、淀の川面に爆音が響きわたり、一瞬の間を置いて、パッと赤く燃え上がる大坂城の天守の姿が、波間に浮かび上がった。

あちこちで、人の雄叫びが、そして馬のいななきが、蹄の音が激しくゆき交い、訝(こだま)する。

時は、元和元年(1615年)5月7日。

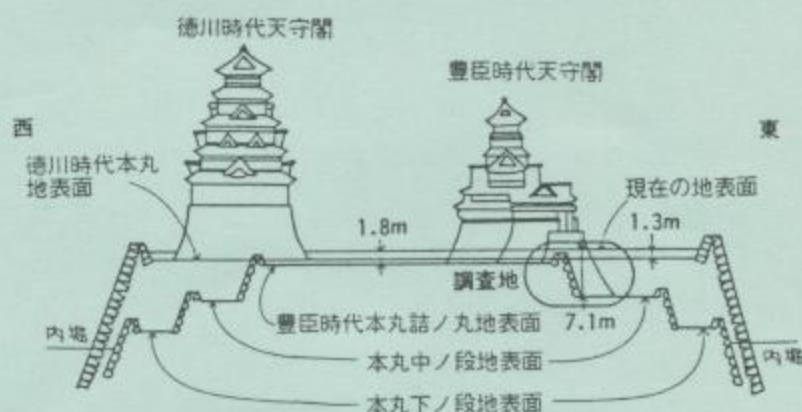
秀吉が死して17年、「天下分け目の戦い」と言われた「関が原の戦い」から15年。世に名高い「大坂夏の陣」は、今ここにクライマックスを迎えようとしている。

舞い上がる黒煙の中に、メラメラと炎上する天守の姿は、壮絶なまでに美しい。

「大坂冬の陣」では難攻不落を誇った大坂城も、4月27日に戦端が開かれて以来、僅か10日ばかりで、落城の時を迎え、秀吉が思い描いた豊臣家未来永劫の夢が、かって、黄金色に燦然と輝き、威容を誇った天守とともに、今まさに、炎の中に燃え尽きようとしている。

秀吉恩顧の武将達が、ことごとく徳川方につき、また前年の「冬の陣」の和睦に際し、大坂城の外濠のみならず内濠までも埋立てられていた、西軍の劣勢は初めから如何ともしがたく、今も語り草となっている、真田幸村、後藤又兵衛、木村重成、塙団右衛門等々の武将達の勇猛で、目覚しい活躍ぶりにもかかわらず、陸続と押し寄せる徳川の大軍勢の前に、西軍は敢えなく敗れ去り、遂に城に火が入ったのであった。

この日、秀吉が築きあげた大坂城は、天守の



炎上とともに灰燼に帰し、そして、翌5月8日には、秀頼、淀君親子が自害するに及び、豊臣家は秀吉、秀頼のわずか2代で滅亡した。

淀の川面に映る、大坂城の美しい天守の姿は今もうない。ただ河原に葦の穂が、風に吹かれて、さびしく揺れているだけである。

織田がつき

羽柴がこねし天下餅

座って食らうは徳川家康

この大坂城の落城によって、天下は名実ともに徳川家康のものとなった。「人心は千々に乱れ、世の中の乱れること麻のごとし」と称された戦国の混乱期を脱し、織田・豊臣による天下統一への時代を経て、今ここに、徳川による支配体制が確立され、以来明治に至る迄の300年の長きにわたる、徳川幕府の時代が幕開けしたのであった。

このように豊臣家が滅び、徳川の時代がスタートはしたが、秀吉が、この「なにわ」の地に、己のロマンを思い描き、築き上げた城下町「大坂」のスケールの大きさと賑わい振りは、人々の脳裏に強く焼付き、徳川幕府による規制にもかかわらず、根強い「太閤人気」として、大坂の人々の心の中にいつまでも生き続けた。(次頁に続く)

今、我々が目にする大阪城は、秀吉が築いた城ではない。「大坂夏の陣」の後に、徳川幕府によって、秀吉の大坂城の上に盛土をし、石垣を組み、その上に3期、約10年の年月を費やして新たに築かれたものであるが、大阪の人々に

は、今でも「太閤さんが築き合ったお城や」と信じられてきている。

第12話 「大阪城 その2 天守炎上」 完  
(中央図書館)

## 図書館活用の手引 ⑬

### AV資料の利用について 奉仕係

3階のメインカウンターから左へ、第1図書室に入ったすぐのところにAV(Audio Visual)コーナーがあります。

ここにはビデオ再生装置2セット、レーザーディスク再生装置1セット、CDデッキ1台、カセットデッキ2台が設置されています。利用は、ヘッドホンによる館内視聴が原則ですが、カセットテープのほか一部のビデオテープについては館外貸出が出来ます。

図書館の資料という場合、通常単行本や雑誌等の活字資料が中心となりますが、いわゆる活字離れのすすむ中で、視聴覚資料、とりわけ映像資料へのウエイトが日まじりに強まっています。

この傾向は、さらに電子図書館や“紙なし情報システム”といったものへと、近未来に向けて急速に広がるものと予測されます。

さて、ここで当館のAV資料を簡単に紹介しておきますと、

#### (1)カセットテープ

英会話を始めとする各国語学関係テープ数百点のほか、文学関係(芥川龍之助作品集など)カセットも若干あります。本と同様3本まで自由に館外帯出できますので、通学時の車内などでの学習にも使えます。

#### (2)ビデオテープ

館外貸出可能なものが約30本、館内専用のものが約200本あります。前者は日本図書館協会を通じて購入した著作権権利処理済みのテープ

## 編集後記

★竹村健一氏の近著に『ゴールデン・ナインティズ』という本がある(当館304T)。「日本に黄金の世紀がやって来る」という景気のいい内容で、ナインティズ(90年代)はその序曲として位置づけられている。氏一流の楽観論と誇張はともかくとしても、わが国がかかってない繁栄の時代を迎えることは間違いなさそうだ。

★繁栄も結構だが、文化が伴ってほしいといつもながらに思う。その文化的拠点の一つとして、図書館の果たすべき役割は大きい、と年頭の今 思いを新たにしたい。(P.Q)

で、この中にはNHKの『地球わんだ一紀行』や『ビデオ文学館』などがあります。今後はこうした貸出可能なテープを増やしていきたいと思えます。

#### (3)CD(コンパクトディスク)

昨年秋から利用開始されたばかりで、まだ資料数は僅かですが、当面クラシック音楽の代表的作品を中心に収集し、いずれ他のジャンルにも幅を広げていきたいと思えます。

カラヤンの『ベートーヴェン交響曲全集』やカザルスの『バッハ・組曲&協奏曲集』など名盤をお楽しみください。

#### (4)LD(レーザーディスク)

CD同様新顔ですが、今のところ当コーナーの目玉となりそうな成長株です。画像はビデオと、音質はCDと競合する形になりますが、画質・音質ともに優れたニューメディアの代表といえます。名曲をバックに古今の名画を鑑賞するNHK『名曲美術館』などいかがでしょうか。

— 以上4つのメディアの他に、今後CD-ROMなども加えて、AVコーナーをより充実させていきたいと思えます。

新しい時代に新しいメディアを駆使して、図書館を楽しく有効に活用してください。

## お知らせ

### 日曜開館

開館日：1月14日、21日、28日の日曜日

利用時間：10時～17時

対象：原則として工大生・短大生に限る

### 春期特別貸出

対象：次年度(90年度)在籍予定者

貸出冊数：6冊以内

受付期間：2月1日～3月24日

なお、春休み期間中も原則として開館します。

(以上、詳細は別途掲示にて発表)

学校法人大阪工大摂南大学図書館報

No.21 (1990.1)

編集発行 大阪工業大学中央図書館

〒535 大阪市旭区大宮5丁目16番1号

TEL 06-952-3131